
電池

そらみみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電池

【Nコード】

N9568C

【作者名】

そらみみ

【あらすじ】

事故だったのか戦争だったのか。僕が目覚めると街が消えていた。誰もいない、死体も無い街を僕はさまよう。廃墟の研究所で出会ったロボットの彼女。世界には奇妙な二人だけだった。

出会い

事故だったのか、戦争だったのか今となっては知るよしもないがある朝目覚めると辺り一面めちゃくちゃで、どうやら生きているのは僕一人のようだった。

こういう時はおきまりのように　こりや夢だ　なんて考えていたんだが

どうやら確固たる現実らしい　と認識したのはそれから1週間位経ってからだった。

そんなに時間がかかったのは死体が一つもなかったのも原因だと思う。

なんで死体が無いのかとか考えたけど　結局わからないままだ。

もともと両親共に早くになくし、天涯孤独の身の上だったし

なにより　親しい友人知人なんてものはいなかった僕にとっては

変な話　あまり日常は

変わらなかったりした。

あんなに大勢いた人間も僕一人になってみると　自然の恵みだけ

で　食べるものはなんとでも

なった。街がこんなにめちゃくちゃなのに山や川は急速に元に戻っ

ていった。陳腐な感想だが

自然の驚異とか思った。

「ラッキ　塩みっけ」

倒壊したかつてコンビニだった建物から塩の他、いろいろな調味料を拝借。

釣具屋や銃砲店から狩りの道具を失敬して動物性タンパク質の確保も比較的容易に

出来るようになったが　人間贅沢な物で　こんな状態でも調味料と

か探して美味しくいただこうと努力しちゃうようだ。

僕はサバイバルの得意な強い人間なんかじゃない。対人関係が苦手な半引きこもりだったが

他人がいないのだ。世界全部が僕の部屋みたいなものだった。

僕の日課は冒険だった。冒険といってもたいしたことじゃなく、ただ崩れたデパートやコンビニ

その他の建物に入って まだ使えそうな物をちよつと借りてくるだけの事なのだが。

よくマンガなんかでは 律儀にお金を誰もいないレジに置いてくるというシーンがあつたが生憎手持ちがそんなに無かつたし、そもそも銀行が稼働していたとしても貯金もそれほどあるわけじゃなかつた。だから自分への言い訳のため、品物は全て借りる という事になっていた。

照りつける太陽。山の向こうから立ち上る入道雲。蝉たちが短い生を謳歌するために激しく鳴いている。僕は夏に何故か少しもの悲しさを覚える。

自分の生まれ育った街からだいぶ離れた所まで来たと思う。僕はただ目的地もなく ただ歩き続けている。そうしていればいつかこの世界が何故こうなつてしまったのか何かヒントになるような物があるかもしれないし、まずなにより何かをしていたかつたからだ。

少し町並みからはずれて山に登っていく道を歩くことにした。昔からそうだった。僕はどこに続いているのかわからない脇道に入っていくのが好きだった。

緩やかな坂道を瓦礫と化した街並みを見下ろしながらゆつくりと上っていく。蝉がこんなに鳴いているのに何故か 静けさを感じる。山といつても少々小高い丘ぐらいだったのですぐに頂上に着いた。

何かの研究所らしい建物が見えた。こういう建物には実際に生活

に役立つ物はあまり無いと今までの廃墟めぐりで経験してきたが、なんだか好奇心から中を覗いてみようと思った。

ガラスが全て割れてしまっていて 壁の一部はどこから来たのやら 成長の早い蔦が取り付きだしておりちよつと不気味な感じもしたのだが 死体も消えてしまうようなこの世界なら 幽霊なんて出るわけ無いな とか根拠のない感想を持ちたりした。

建物の中はそんなに崩れてはいなかった。大きな窓が多く、陽の光が結構奥まで届いており壁から何から真っ白だったこともあり、思いの外 明るい。

こんな世界になつて最初の頃は 何処かで生きている誰かに会うんじゃないだろうか？ と希望とも恐れともつかぬ思いをもって探索していたものだが、最近では 誰もいるわけ無いと どうとうと奥に進んでいく。

隅から順に各部屋を覗いていく。どの部屋も大きなコンピュータや、複雑な設計図らしきもの

造りかけの何かの部品が沢山転がっており、どうやら工業用ロボットや新型の車、そんな様な物を設計、製造する研究所のようだった。そんな最先端の研究も 今の僕にはまったく役に立たないものだったりするのは、なんだか皮肉を具現化して見えているようで ちよつと変な笑いが出た。

「だめだな、こりゃ。」

思わず独り言をいい、その声が瓦礫の山や、機械部品に吸い込まれていくのを聞いていると なんだか無性にむなしくなってきた。

次の部屋を最後にしようと扉を開けたとき 目の隅に今までの状況からするとあり得ない物が引つかかった。

「え？ 女の人の顔？」

崩れて山になった元壁だった物の隙間から 眼を閉じた 黒髪の女の人の顔がこちらを向いていた。

「うえ？まじで？」

意味のない独り言をいいながら、そちらに近づく。

見間違えじゃない、確かに女の人の顔だ。今まで生存者はおるか、死体さえ見つけることは無かったのに、こりやなにかの間違いだろう。とか思いながらも確認するために顔が埋もれている瓦礫を崩れないようにゆっくりどけていった。

瓦礫の下からは女の人の全身が現れてきた。顔だけじゃなくってちよつと僕はホツとする。

あらかたどけてしまうと 謎が解けた。その女の人の右腕は何処かへとれてしまっていたのだが

そこから精密な機械部品が見えたのだ。

「ロボットかぁ」

残念なような、そして今までのルールが破られなかった事に安心してたような、そんな気持ちに僕を包む。

ここまで掘り出したのだから僕は好奇心からそれを瓦礫の山から引っ張り出した。

それは中身は金属で出来ているのだろうが、外側はまるで本物の人間のような肌触りだった。

そして意外なほど軽かった。

「さて、と。」

引っ張り出したそれを床に横たえ、改めて見てみると まるで本物の人間の様に見える。

腰まである長い黒髪に色白の肌、睫毛まで生えている。病院の患者が着るような白いワンピースを着ているが、それは埋まっていた為にみすばらしく汚れている。

整った顔立ちと 壁が崩れてきたときに取れてしまったのだろう千切れた右腕がアンバランスだ。

外見上でそれがロボットだと伝えてくるのは、その無くなった右腕と 引つ張り出す時に見つけたのだが、うなじにある何かを差し込む為のような金属が見えている箇所だけだ。

「よくできてるなあ。」

僕はそう言いながら ちょっとこれを動かしてみたいと思った。でも右腕は壊れているし、なにより精密機械だから瓦礫に埋もれたときのショックで外からは見えないところが壊れているかもしれない。多分動かないだろうな と半分諦めながらも見えるところにスイッチでもないものかと探してみたが、それらしい物は見つけられなかった。

ひよつとするとワンピースに隠れた場所にスイッチはあるんじゃないかかと思っただけで何となくロボットとはいえ、若い女の人の姿をしたものだ、服の下を探すのはなんだかはばかられた。

「？」

腕組みをして さてどうしよう と考えている僕の目に瓦礫の外からの光を反射して光る金属の部品が入ってきた。他にもなんかわからないがらくたは沢山そこらに転がっているのだがなぜかその部品だけは僕の意識を引いた。

「ひよつとして これかな？」

そう、ロボットを引っ張り出すときに気がついた首の後ろの窪み、そこにぴったりとおさまりそうな形状をその部品はしていた。

僕は駄目元でその部品をそのロボットのうなじからセットしてみた。

かちっ

金具と金具がしっかりと合まる音がする。

僕は息を詰めて見守った。

ピッ

短い電子音がした。

「まだ壊れてなかったんだ。」

ちょっとした期待と不安でロボットが動き出すのを待った。

5分位経っただろうか、最初の電子音以来 音もしなければ動きもしない。

「やっぱり駄目かぁ」

僕がしょうがないかとしゃがみ込んでいた体勢から立ち上がりかけたその時

ピクッ

まぶたが動いた気がした。じっとその立ち上がりかけた体勢のまま見守っていると ゆっくりとゆっくりとまぶたが開いていく。その瞳が僕を観る。

「こんにちわ」

細いが 凜とした 通る声。

「こ、こんにちわ。」

いきなりの挨拶に僕はどぎまぎしながら返事をする。
が、きつとプログラム通りに電源が入るところという風にまず挨拶をするのだらうと思い直し次の動きを見守る。

「あなたはだれですか？」

会話が出来るほど高等なロボットなんて出来ていたのか？と疑問符を頭に浮かべながら

「ケンジと言います」

と 一応返してみる。

「ケンジさん はじめまして 私はアオイと言います。」

よくできた会話プログラムだと思う。聞き取った名前を当てはめて自動的に返すのだらう。

「ところで何故サクラダラボはこんなに崩れているのですか？何が起きたのですか？」

「？」

え、周りの状況を加味した上での質問？自分で考えてるのか？と驚きつつもなんとか返事をする

「僕が目覚めるとこうなっていたんだ。そう、ちょうど君が今日覚めて周りの状況がわからないように、僕もわからない。」

なんてことだ、このロボットはまるで意識があるように振る舞う。僕は驚きつつもいくつかの質問に答えていった。答えたといってもほとんどのことは僕もわからない事だったのだが。

彼女は、ロボットに性別があればだが、見た目が女性だから便宜上こういうが この研究所サクラダラボで人工知能の研究の為に創られたロボットであることがわかった。

赤ちゃんのような状態で創られ、人間と同じ時間をかけて成長してきた人工知能だということだった。現実世界のフィードバックが人間と同じ知能を創る為には必要だと考えられたためこのような現実の身体を与えられているそうだ。正直根っからの文系の僕には説明してくれた事のほとんどが理解不能だったのだが、まあ大体そういうことらしい。

千切れた右腕を意識していないとまるで本物の人間と会話をしているようだな と考えていると僕の視線の先をみてまるで今気づいたように

「右腕 とれてる。」

と他人事のようにつぶやいた。

僕は正直困っていた。興味本位で電源をいれたのはいいものの、このままこのロボットをここに置き去りにしていいものかどうか判断できなかった。

「外の世界を見てみたいのです。一緒に行つては駄目ですか？」

僕の考えを見透かすように彼女は聞いてきた。

とりあえず断る理由もないので僕は了解した。

奇妙な連れが 僕に出来た。

「外に出る前にいくつか持っていきたい物があるのですが。」

ロボットの身支度。まさか着替えとか言っくんじやないだろうなとか訝しんでいると

「電池です。ケンジさんが私にセットしてくれた物と同じ物がまだいくつかこの部屋にあるはずなんです。」

そこで初めて僕がはめ込んだ部品が電池だったのだとわかった。電池は彼女が埋もれていた場所の近くに小さなトランクに入つてあつた。中を開けてみると12個の窪みがありそのうち11個に僕が彼女のうなじにはめ込んだのと同じ部品が入っていた。空いている1個の空間は今彼女のうなじにはまっている物だろう。彼女の上に壁が崩れてきた時に電池が外れ、動けなくなっていたのだらうと考えた。

彼女は残っている左腕でその電池が入った小さなトランクを持つと

「お待たせしました。」

とだけ言い、僕の後ろに立った。

出会い（後書き）

すみません。

この小説 まだ書き続けてもいいもんでしょうか？

書きたいから書いてますが、僕の語りかけは誰かに届くのでしょうか？

彼女

サクラダラボから外に出ると陽はやや傾いていた。

「何処に向かっているんですか？」

ロボットが聞いてくる。

「特に何処ってわけじゃないんだ。ここじゃない何処かには何かあるんじゃないかって
それで旅つてのかな、歩いて来たんだよ。この研究所を見つけたのも偶然でさ。」

と僕。ロボットは そうなんだ って感じの顔をしてちょっと頷く。
そして

「目的地のない旅つてのもいいですね。」

と、なんだかわかるような わからないような 感想を口にした。

「それじゃ、先ず私の行つてみたい所、いいですか？」

ロボットの行つてみたい所？ ちょっと想像できないな とか考え込んでいると

もう先に立って歩き始めていた。

「ねえ、何処に行くの？」

後を追いかける。

「アオイって呼んでください。目覚めたときにも言いましたが、私にはアオイと言う名前があります。」

そう言われて名前で呼ぼうとしてはたと気づく。アオイさん？アオイちゃん？はたまたアオイと呼び捨て？
どれが一番しっくりくるのだろう。とりあえず無難に

「あゝ、アオイさん、いったい何処に行くのかな？」

と呼ぶことにする。ロボットにさんづけも、なんだか変な感じだ。

「デパートです。」

意外な返事だった。

「デパート？」

思わず聞き返す。

「そう、デパートです。」

ロボットがデパートに何の用だ？と思っていると、疑問が顔に出ているのか

「服を着替えたいんです。身なりはきちんと、清潔な服を着るようにと教えられています。」

と答えてくれた。

「私、埋まっていたでしょう？ぼろぼろになったこの服、着替えたんです。誰もいないと聞きましたが、他人の家から貰ってくるのも気がとがめるし。それにデパートならサイズもいろいろあるでしょうから。」

他人の家から貰うのも、デパートから貰うのもあんまり変わらないんじゃないだろうかと思ったが、サイズの面ではなるほど思ったので、一応納得しておいた。

「この街のデパートはまだ誰もいなくなる前、何度も行った事があります。実験の一環ですが。沢山洋服があつて楽しかったのを覚えています。」

とロボットは楽しそうに話す。楽しいとか、本当にそんな感情があるんだろうか？とか考えたがそれを証明するのは例え相手が本物の人間でも無理だと思い、考え続けるのはやめにしておいた。

街はあまり大きくはなかった。駅からまっすぐに延びる大通り、その両側にファッショビルやデパートが建ち並び、それに平行するようにアーケードの商店街が通っていた。大通りの端に立つと街の全景が見渡せる位の規模だ。少し前ならここも沢山の人で溢れていたのだろうが、今は僕達意外動く物もない。

デパートに向かう間、ロボットに何故誰もいなくなってしまったのかについてまた質問されたが今まで歩いてきた中には答えはあるか、ヒントさえ見つけられなかったので結局何もわからないという結論しか出なかった。

「それにしても機能停止したボディーつさえ見つけられないのも不思議ですね。」

「機能停止？ああ、死体の事？そうだね、研究所に来るまでも一度

も見なかったよ。本当に訳がわからないんだ、一体全体何がおきたのか。」

そう僕が答えたとき、ちょうどデパートにたどり着きその話はそこまでとなった。

「この入り口からは入っていけそうですね。」

比較的原型をとどめているデパートの北側の入り口から中に入ることにした。

手回し式の発電もできる懐中電灯は一つしか持っていかなかったのは自分の探索は後にしてまずはロボットと一緒に服を探すことにした。

止まってしまっているエスカレータを上り2階へ上るとそこは若者向けの洋服を売っているフロアだった。

「こんな所ちゃんと見て廻った事ないよ。」

半引きこもりだった僕には当然、彼女なんていたことがなく誰かといっしょに洋服を選ぶなんてしたことが無かった。

ロボットはちよつと迷って、いろいろな店を見て回っていたが最終的にはあまり奇抜ではなく落ち着いた服が多くあるお店に決めたようだった。

店名を懐中電灯で覗いてみたが、崩した字体で書かれており、ブランド等には疎い僕にはなんて読むのかわからない。

「これなんてどうでしょうか？」

ロボットは今着ているワンピースとさほど変わらない服を広げて自分にあてている。

正直こういう時なんて言っていないのかわからず

「いいんじゃない？」

とだけ答えた。困った。僕はなんだかあらぬ方向を見る。

「これにします。」

僕の返事で決めたのかそれとも僕の意見なんてもともともうでもよかったのかわからないがロボットはそのワンピースが気に入ったよううでなんだか声はずんでいた。

さて次は地下にでも下りて食料でも探そうかと声をかけようとロボットの方を振り向くとロボットはそこでもう着替えはじめていた。ロボットとはいえ、一応女の人の姿だ。なんだか見ちゃいけないような気がして僕は後ろを向いていた。

後ろで着替える時の衣擦れの音がする。そついや片腕なのにうまく着替えられるのだろうか？とか思ったのだがだからといって着替えを手伝うのもなんだか恥ずかしく思い、ロボットにそんな風に思ってしまう僕はちょっとおかしいのではなんて考えてもいた。

「着替え終わりましたよ。私はこれで満足です。ケンジさんは何かデパートで見ていく物がありますか？」

片腕でも器用に着替えられたようだ。なんて呼ぶ種類の洋服かは知らなかったが、袖のない肩の出ている軽そうな白いワンピースだった。ちよつとドキリとして、そんな自分はやっぱりおかしいのかとまた思ったりした。僕はなんだか変な顔をしていたのだろう

「どうしましたか？」

とロボットが聞いてきた。ロボットの彼女に対してなんだかドキリとした自分が恥ずかしく、地下で食料品を確保したいと伝えて、足早にその店をでてエスカレータを下っていく。

「あ、待つてください。」

明かりは僕しか持っていなかった。彼女は駆け足で僕の後についてきた。

人間、というか生き物は食事をしないと生きていけないと言う事は知っているのだろう、僕がまだ食べられる保存食料や調味料、缶詰等をリュックに詰めているのを見ていても特に質問されることは無かった。僕はふと、今は夏だから自然の恵みをふんだんに得ることが出来るが初めて迎える冬はどうして行けばいいのだろうか？と不安になったのだが、そのうち本屋で保存食の作り方の載っているアウトドアの教本でも探してみよう等と考えていた。

夜になった。寝る場所をいろいろ探したが、結局神社のお社に決定した。

コンクリートのビル内ではなんだか寝ている間に倒壊しそうで怖かったし、こういう時は木造の建物の方が強い気がしていたからだ。神社の境内でたき火をおこし、今日デパートで見つけてきた缶詰を食べる。ふとロボットの方を見てみたら僕を見ている。

「どうかした？」

僕が聞くと

「おいしいですか？」

と質問された。缶詰だ、特に旨くも不味くもない。そのまま答えると

「私はおいしいとかおいしくないだとか、わかりません。あのまま研究が進んでいたら私にもわかるようになったのでしょうか？」

となんだか悲しそうな顔をした。ここまで自然な行動が出来るロボットが創れる技術があったのだ、何時かは味覚も感じられるようになったかもしれない。

「君と一緒に物を食べて、感想を聞いてみたかったな。」

なんとなく、僕はそう答えてから彼女が少しかわいそうだな と思った。

食事も終わるとする事もなくなり、時間は早いけどもう寝ようという事になった。

そういえばロボットも寝るのだろうか？と疑問が浮かんだので聞いてみると

「実際は寝なくても平気ですが、電池の節約と人間と共に生活する事を考えて 眠くなるようにプログラムされています。」

との事だった。聞いてみると 少し眠くなっている との事だったので2人、神社のお社の板の間で横になって眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9568c/>

電池

2010年10月26日02時48分発行